





源氏物語



紫式部

勸修寺家元祖良門五代孫越前守兼京極時女 著述云云

右説にアイトイトモ式部が作正説ナリステニ六百番歌合判ニ後成ニ紫式部ハ
歌ヨシノホトヨリハ物カク筆ハ上ノウハ花宴ノ巻ハ艶ナルモノニテト
アリ他説不足信用歟

紫式部上東門院ノ仰ヲウケタマハリテ石山ニコモリ先須磨明石ノ兩卷ヲ
カク第京極巻ト云傳ル也コト正説ト可覚悟歟スベテ諸抄ニサマクノ
説ヲノスルトイハトモ世説ヲモツテ可信用歟不詮往昔ノ事不可有
決断者歟世物語ハ世ノウツリカハルニウケテ人ノ心モサマクニウツロヒユキ
生者必滅盛者必衰ノ理ヲノセテ勸善懲惡ヲシメシ其言ノ葉又雅ニ

シテ古風ヲ永世ニ存ス後成ハ世書ヲミザラムモノハ貴根ノ事ナリト
 カシ為家郷モ毎下ノ事トモ書ノコサルスヘテ世書ヲミルハ公古風ヲ存シ
 口古語ヲソラシ世ノコトナリヲ觀スル事肝要也三教ノ奥儀横豎ノ
 説ナトアレドモ強テセシサク我歌ニ益ナシ定家卿伊勢物語奥書ニモ初筆
 言葉ヲの界トアリソノ時代源氏ニルモノ識者ヲタテ系圖ヲトリ
 アツカフ事ヲ公ニイラスヨシ言オカシ又金世書公古風ニルル助光恪スニ
 不整院詠奇一研ノ注ニ一ニ及ミタリトモ不審ヲヒラクニイタルガラストノセラル
 減不以弊覽セザレハ其意辨知シカタシ

桐壺

一名ツホセシサイ

岷

奥八云

桐壺ノ更衣ノ事トモミルモノナキ

桐壺ハ大内春世同淑景也源良ノ
母更衣此所ニ住ル此名アリ

此卷源氏誕生より十五歳迄ノ事トモ
ミルモノナキ

トモミルモノナキ

十五歳迄ノ事トモミルモノナキ

帝木ノ卷ハ十六歳よりノ事トモ
ミルモノナキ

志留ナリ

いづきのは時より、女侍更衣何まきまひ

木田人

流きもなりのいづきもいづきもいづきもいづきも

桐壺更衣也

あぬが、すくはれてときあふきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

病カチナニル也
兩説岷清

坊もうとてはハ 去ま坊也
源氏をままはふとく人としてふも思は
ゆるとくハ 不用不善 不能うとけり
あゝとて也

山 史記九百石本紀三の太后者高祖微
時妃也生孝惠帝女魯元太后
臣后入臨西侯呂公益呂宜王

山 史記九百石本紀三の太后者高祖微
時妃也生孝惠帝女魯元太后
臣后入臨西侯呂公益呂宜王

山 史記九百石本紀三の太后者高祖微
時妃也生孝惠帝女魯元太后
臣后入臨西侯呂公益呂宜王

山 史記九百石本紀三の太后者高祖微
時妃也生孝惠帝女魯元太后
臣后入臨西侯呂公益呂宜王

山 史記九百石本紀三の太后者高祖微
時妃也生孝惠帝女魯元太后
臣后入臨西侯呂公益呂宜王

春宮 不用不善不能
にわいしをすきんハ坊もよとてはハ

源 居
みこの井ききよふべきあめりといはみこの女法也

私微殿ハ
にゆいさうり人よりききよふまうり

私微殿
わむとぬき法思ひなべてけむみこも

私微殿
にけいすをびけいこの法いさををえがなを

私微殿
とづら〜公をり〜にわいし〜をききよひ

私微殿
をるか〜法〜げをたはえき〜をな〜

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

私微殿
にわいし〜をききよふ〜にわいし〜わが

仰可入羣之状 詞云具令羣令入白

清寧天皇三年奉德計確計以玉日蓋

車迎入宮中

大德堂

一區大率即桓武太子仁壽三賜車九

旧典不達傳舉朝重之仍有勅

侍讀賜鞦韆車例 從三位官卿至御下

以年老賜小車例 室龜初至位上羽東翼

侍讀賜鞦韆車例 遍昭 仁和三十五

仁明帝光孝藤原子 守守賜鞦韆車例

依病退去之時被賜鞦韆車幸去之後

心少納言被贈三位

未引幼之

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

かざりとしとるく

生別格不修其情況此之乳別子

かみりてはるのりてい
格と更なるはるのりてい
かみりてはるのりてい
かみりてはるのりてい

源のりてはるのりてい

なよこあむもれまはるのりてい

とよふ人のなよこあむもれまはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

火葬也 火葬始 道昭和尚 三月己未

更衣の世ありてはれまひいふ

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

源のりてはるのりてい

なよこあむもれまはるのりてい

とよふ人のなよこあむもれまはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

いひなもなほおはるのりてい

三位のうね
清和外母 山城國守宮基時
贈三位例 位事

女清とたふとせむ

清和愛の心はなほしきなり
女清とたふとせむと不逞の心
めしてせむ送三位成道のゆふ也

多卿女為女清例

藤元喜子 中御言山藤女 攝義子 参議藤原
光香女清 右大將定國女 藤原子 参議藤原
藤和香子 延喜女清 藤原子 延喜女清

藤原子 華山院女 藤原子 兼通女
侍臣女為女清例 藤原子 内膳女清

橋幸子 延喜女清 藤原子 仁明女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

大内言女為后例 藤原子 兼通女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清
藤原子 兼通女清 藤原子 兼通女清

猶存生三不浴具思又贈后唯
有例於世傳之仍四位之上二階増之
被贈從三位也

存生の時御座をりすれば御門の
政道も忘れられたり

存生の時御座をりすれば御門の
政道も忘れられたり

存生の時御座をりすれば御門の
政道も忘れられたり

存生の時御座をりすれば御門の
政道も忘れられたり

存生の時御座をりすれば御門の
政道も忘れられたり

存生の時御座をりすれば御門の
政道も忘れられたり

うね成りきまふり 叔使きそりり

冥命よむなんかなりよこたりき

女清とたふとせむなるめがらふ

わらわをきまふり

きまつけてもふらんきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

わらわをきまふり

いそいでつらんまつたけき秋也

帝の法御りまゝとてそまらるる人の

袖もつるけき秋なり

いれをつるけき秋もあつて

○更衣進者へ友ノ事ナリ山門御慈教ニ

アカシクラサセ給テ秋ニナリ名サテ感

概ハテタシ此物指カヤウノ所心付テ

此レニ思詠ルカトナレ

なまのり

更衣ノ事ヲ弘微殿名ノ死後イ

いひれり(ふさま)

なまのり(なまのり) 秋の字秋也

此節詞ニ物思ひ志此カハ一々

いさしやうアハれ秋イハるる者

弘微殿名トモハ秋ハとんたふ也

人の性とうさつワリ

執員命婦

左右衛門命婦也信帶弓箭執員

夕月

暮月秋カ 夕附夜 日又日本記

なりめ

櫻町院仰なめ感ノ意ト也此

なめナド誠感ノ意ニ徹ス可秘

やあつりゆもを物をとりり

むし玉のやえのうつ

ゆめまゝも悔きり

本哥のむつりれいむし玉のま

あつりゆも悔きり

いりふんがのえりゆき

物おもひまじり

抱あまのぬむ今二使うみあひ

いり奉秋ま

まじりゆも作者のむしり

うすたつへいそいでつらんま

秋なり、なまのりも人好むの

じりやる人の法衣はあつた弘微殿

なまのりはなまのり(なまのり)

い宮をいそいでつらんま

法衣はあつた弘微殿

女房あめのとまをいそいでつらんま

まをいそいでつらんま

うまはあつた弘微殿

なまのり(なまのり) 秋の字秋也

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

いそいでつらんま

山 寡 老而無妻謂之艮老而無夫謂之
 寡 泣曰年上而無妻為艮也五十
 以上而無夫為寡也 礼記

月乎はうろやむらうもさうは
 さう入る

山 母君もいづるもたつひもあは
 細 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

山 母君もいづるもたつひもあは
 母君もいづるもたつひもあは

うなつたへきいづまきつざい

しむあもきいんぶふなよを志び

てあま源りちなんやわのいとれい

つらき落けさなふきぶーぬも

ひらるうにほふと源くまのりま

なご源り命婦の初

むとらとみつうけさんふさく

みりまららんばげつまね

まも阿地げけいよのひらる

うふけきさるもそぬぬうま

なむふでそぐりゆると源ふき

うらめ源母初

に回せと源ひりまをんをんぬ

いづい源心初

やとまちすぐさ月日源り

いそ志のびざ源ふはのりま源まよ源ま源ざ源よ

なむ源源推知

やうい源源門上相更衣トモ心よ

つらなう源げいまはなをむう源れ

うらな源な源な源す源す源て源あ源ー源あ源な源ど源

れいあはすまふに

或折木ふすつたもあふふ

のれいよふふふふふふふ

自余の五御更衣たちと相更衣

たふひふふふふふふふ

ふんふふふ

若宮のいとれいふふふ

はつふふふ

是より命婦の初也初定の初を

海とととととととととと

人の心とととととととと

お気色を足まねやくゆふ

まあふふふふふふふ

心初ふふふ

木回せとをひふふ

天子のみことゆを明証るも

光まると木回

いづい

月日の色をまふふふふ

こははのよ

こははのよ
ふたに木甲 春はうすを別とあり
浦のうらり 春あわく 佐竹のうら
春より 内ありく 木甲 春は
こははのよ 春はうすを別とあり

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ
前清使のうらり

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ
かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

こははのよ

こははのよ
かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

かこき仰をせぬ

人の子の心は

更重の母命歸す

終をのりて

更重の母命歸す

更重の母命歸す

或

或

或

大納言

大納言

まがふけのやえもきつづふ

きよひ、そら、むりり

侍をいつら

きまふと

つのだ

うの

ふも

うな

何りし人

なるま

回

い

え

ら

な

に

そ

成

よ

成

人

可

よこぬなるわうま〜
山 薬師経九種横死之中八者横死
毒藥感待兄詛之所中害
或毒あり神佛にいのり
するは横死の中と云なり

かこは心ゆ〜
御門の法務ありしをうりて
つらくたよとていふのわかれ
まひひり〜

山 九條右丞桐師神公息女七之内嫡女
村中宮安子内融冷泉二代國母也才三
一女重明親王四方中宮被前之次有
垣見中宮為媒入宮中有容通之
令連續其後中宮重明親王無子遂
召入焉尚侍依負觀殿且之寵之甚
不知晝夜世人歎曰聖主賢王於當代
万邦稱之而登子尚侍入朝ノ万機
為之廢

山 或秘抄の源氏ノカヲ遣ハ不令也定家
カラ遣ハル物也其色ハモシハ母舅之妻
タル古今ナモ同前也
山 或秘抄の源氏ノカヲ遣ハ不令也定家
カラ遣ハル物也其色ハモシハ母舅之妻
タル古今ナモ同前也

人のうま見えくつらう、やまう〜
に回くなりういし、月よこ〜
ま〜つね子〜
かこは心ゆ〜
男ふ〜
このおなまおど〜
う〜
志ら〜
人め〜
な〜

つらう〜
世よ〜
人〜
う〜
ま〜
い〜
も〜
お〜
う〜

夜はつらつら
いたくはつらつと

月入るの
まはつたは秋の木のうき回
ゆきまをまわすふもつりて
ゆき秋のゆきまをまわす
世景氣もくを觀念スル巻く
ノカヤウノ秋景氣ヲ觀念スル詠作
一助ニナル也

出の声くもつらつら
母催ゆきをゆきまわす
或は感時秋涙恨別鳥驚心
草のゆきまわす
蓮のゆきまわす

あむむの声の
意我が声を鈴むの音
かきかきつらつら木まわす
わたり

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

夜はたふけぬればこよひもぐさす
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

あむむの
あむむの

壺前裁

此卷一名也

可 清涼殿東庭 并同西庭 朝餉送戒

被裁前裁 延喜元右衛門裁草葉

拾遺中宮うらまはるる乃何や

内まの前裁乃つゆぬぬ

天曆御製

秋枕のわづらふ葉のつゝさうも
きめりしんぬ何ゆたといん

たれひいづらさるぬば、ゆくつらりきん

更香母スス也

とけり、れうーおこねまどらういあ

更香母

しきりのさひまてまうん、やんぎ

うらまへし、やうさるまてまうで志がし

河 影護ウロメス 和急りれりやの儀也

つむむいひやうしぬめり、思ひまうめ

速 ともくや

源内裏ニ

たて、すぐぐともえま、つとをまうめ

金坪内裏ニ帰第テ

まうりうぬぬなり、桑、命ぬ、まうい

に、いごり、たぬそざうもろを

御門御寝すキヲ

御前

此卷一名トモリ

あまのしほろそまう、木下人のつがもん

ぶのいひれりうよさうらなるを、

御覽するやうめて

此やうぬむ心付付し、まて一字二字

ノ事、に、ぬ、心、ま、り、此物諸よ

か、つ、詠、作、と、移、心、一、字、を、も

大、切、の、事、ま、り、詠、奇、一、辨、も、

ぬ、ま、り、と、つ、り、さ、ハ、一、字、な、れ

と、も、三、十、一、字、の、つ、り、さ、な、り

よ、め、り、し、と、ま、り、の、と、こ、ろ

心、を、つ、り、さ、る、を、ま、り、ま、り

長根哥御繪

伊勢集云長根哥の信乃屏風亭子

院まのやねて所くの石をうら

き、ひ、ま、り、御、門、の、御、ま、り

白、お、葉、れ、色、に、日、の、影、も、お、

お、お、ふ、林、の、深、な、り、り、り、御、

お、お、ふ、林、の、深、な、り、り、り、御、

あ、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り

あ、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り

貫、之、故、未、知、ゆ、い

詩、未、知、ゆ、い

後白河院平治丸鳥羽上皇御撰位相後載之

御覽むふやうま、志のびやうむまき

長ツカシ

のざりの女扇、お人まうそせ、

清まねづり、と、ま、り、の、ま、り、此、乃、明

く、れ、清、ら、ん、ぢ、る、ち、や、う、い、ん、の、乃、清、

長根哥

亭子院の、の、ま、り、の、ま、り、い、せ、つ、ま、

宇多院御事 延喜帝又御門也

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

山和古七序三の歌も、うらあ、い、い、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

いほれいとよまつけも
更衣進者の居ておぼしはゆれ
おまをこしくおく更衣の命を
木一母君のおしこむおま
とらひたり催まはる心も
らり

あま風ふせよ
あま風ふせよと源の更衣
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ
新古今雜下
野分ふりばはたかまを
たふはまうらうらよ

あま風ふせよ
あま風ふせよと源の更衣
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ
新古今雜下
野分ふりばはたかまを
たふはまうらうらよ

時の周もたつたなり
暫時あひまわつたにわつた
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ

あま風ふせよ
あま風ふせよと源の更衣
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ

更衣母返り也
清うめり清見むれは、
をきどらもまづ大いほれいとよまつけも
つあてもうよまはる心も

あま風ふせよ
あま風ふせよと源の更衣
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ

あま風ふせよ
あま風ふせよと源の更衣
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ

あま風ふせよ
あま風ふせよと源の更衣
あつた心か心をささぐ
あつた心か心をささぐ

命なきやこころ
更衣母の居られぬをいふ
やあり命ぬのうれを奏し
たふかきも初めつこし初定
あはれか
あはれか
あはれか

山の
奥可衣取金釵鈿各折具手
授使者曰為我謝太上皇謹是物尊
具好也長恨奇

去京の使はまろく楊貴妃なり
あり命ぬまもあなまこ
のまのまののまのまのの
うんれあまもつとたのす
うんれ也

右ノ釋だつものの中製ニカサテ
こしハヨク具意アキラカナリ
大液の
帰来池苑皆依回太液芙蓉未央柳
芙蓉如柳如眉對如何不淚也

なつううううう
あまううううう
あまううううう
我心を常て人よ恋すべ也

比翼連理
夜半無人私語時在天願作
比翼鳥在地願為連理枝
注云樹二枝相向連

接脉理而生鳥連理枝明皇妃子
私相盟誓鳥各一羽相比而飛鳥
比翼鳥
介雅流曰南方有比翼一云
春經援神契云德至草木則木連理

天啓御集
いそいで世あはれの後のぬりも
そのをいそいでとわりなん
伊達
女御芳子 宣耀殿
秋らふふとのそらにわがはる
わらわのそらに枝とけりなん

命なきやこころ
更衣母の居られぬをいふ
やあり命ぬのうれを奏し
たふかきも初めつこし初定
あはれか
あはれか
あはれか

山の
奥可衣取金釵鈿各折具手
授使者曰為我謝太上皇謹是物尊
具好也長恨奇

去京の使はまろく楊貴妃なり
あり命ぬまもあなまこ
のまのまののまのまのの
うんれあまもつとたのす
うんれ也

右ノ釋だつものの中製ニカサテ
こしハヨク具意アキラカナリ
大液の
帰来池苑皆依回太液芙蓉未央柳
芙蓉如柳如眉對如何不淚也

なつううううう
あまううううう
あまううううう
我心を常て人よ恋すべ也

比翼連理
夜半無人私語時在天願作
比翼鳥在地願為連理枝
注云樹二枝相向連

接脉理而生鳥連理枝明皇妃子
私相盟誓鳥各一羽相比而飛鳥
比翼鳥
介雅流曰南方有比翼一云
春經援神契云德至草木則木連理

天啓御集
いそいで世あはれの後のぬりも
そのをいそいでとわりなん
伊達
女御芳子 宣耀殿
秋らふふとのそらにわがはる
わらわのそらに枝とけりなん

弘徽殿小

弘徽殿もむらさきいろの御局
心メニ法方への御中のおかしき御局
トアリ

弘徽殿上御局
禁秘御抄云

藤壺上御局
右女御更衣可希上
近代為法也

秋戸
弘徽殿上御局
女御更衣可希上
是御門上可有也

紫白上局ハ藤壺弘弘キ及ノ二局ニ
限上立身花嫁人拾局然相
壺更衣以後藤壺拾上局之儀太以
非礼也可付眼

河内記
寂押立文 日本記

廢朝依事淺深或号日或三日也
止音奏警御禁中無物音當清涼
殿御簾 帷及敷日以吉日被上御簾
禁秘抄也

更衣亮非可及廢朝况徑數日
旅理者不違雖然隨時宜亦道也

月よりぬ
トアリ次三月八日
コニ月よりぬトカキタリ
サテトスル時刻ニルカトシ

月よりぬトカキタリ
トアリ次三月八日
コニ月よりぬトカキタリ
サテトスル時刻ニルカトシ

月落長安半夜鐘の音もかき
寸五天到日頭應白月落長安半

水鐘是ハ二勺ニ五藏法師
ノ路ノ旁ヲ書尽ノ落勺ニ如此云々
下カ妙多ヲモルルカノ長傷を
言御して月よりぬト今眼を
乃系氣をうつす所を影を

いふ也

弘徽殿の御局

弘徽殿の御局

弘徽殿の御局

むこううづらの御つねの御局

そまらむ月の御局

まじり御局

無言の上御局

御局

片腹痛

たふかり月よりぬ

雲のふもなを

あむむんあさちの御局

つと御局

お申のこ急き

おまを御局

何たよ木き

おまを御局

あまを御局

きこうめを御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

御局

やまのくを流雲より流れて
こころ

やまのくを流雲より流れて
こころ
やまのくを流雲より流れて
こころ

右近夜行

亥一対左近夜行官人初
奏時終子四対自せ一対右
近衛宿申事至卯一刻
内登亥一刻奏宿簡

阿つらもあつてと
五世の世の事をおつらつら
伊勢が長根奇と詠する也

朝餉

朝餉二間也於此供之
女房不候之時は御侍臣四位
撰具人候陪膳例也

大床子御膳

於清凉殿供之
上古六公卿並女房陪膳之例有之
家事に於ける
津門餘事八云路十九流むと云たり

たぐいさ
よりのほくむをわたりとあり
そくをさうふなり退くありと
かゝる万事をむかひすく退居
一なる歎
ゆー
此詞所、カリマリコ、ハ奇物ノ心也孟
津ニハツツキ心トアリ、又ヌシタ心也
藤原ノ詞ナリト格別也、家説曰心也

ばうわれさき多く、大床子の御を乃

なほは、ふたげやうれば、
陪膳
まゐ、どんまが、ぬうさうあ、と流

なげく、まぶらちうさう、ぬうさ
糸、木と、女、いと、うな、よ、り、ご、れ

といひあをさう、なげく、まぶらちきり
こゝろ、木、ま、あ、ち、う、の、人、れ

こゝろ、木、ま、あ、ち、う、の、人、れ
こゝろ、木、ま、あ、ち、う、の、人、れ

世のなう、乃、と、流、も、木、げ、よ、り、さ、う、に
な、り、ゆ、く、ま、あ、ち、う、の、人、れ

人のえ、う、り、ま、あ、ち、う、の、人、れ
耳言万葉
りき、な、が、さ、き、う、り、月、日、つ、て、わ、ら、う、ま、い、り

の春、坊、ま、い、り
源内裏三ノリ給也

の春、坊、ま、い、り
源内裏三ノリ給也

源内裏三ノリ給也
源内裏三ノリ給也

源内裏三ノリ給也
源内裏三ノリ給也

みせのうけひくまよ
兄ラスチ、オヲタツル事世ノ
兼リシキキナシハカヘツテ
源ノ為ニテスモトヨリ天理ニ
サカフ事ナレハ高宮ハカリテ又
ニモ出サセタヘハヤコト多寵愛
ニヨハヤタヘトモ聖主ナレハ如世也
上人ヨリ下野民ニイタリテノ友
誠トシルハ

世人

後宇多院御世仁仕ハカリテ世ノト
ヨシオラセリ後嵯峨院御世邦仁ナレハ
儒書ノ邦人ニクニタミトヨム所也
かの古たじゆの方 源祖母也祖母ヲオバ
ト云事
源重之母の近江の家に侍るまむかの
阿つありせしとて事とて元此方の
をいひぬるこころひて侍れり
木の女のちん侍り
木の歌と木とありてはせめて
我子のちん侍りぬる事

兄むつひなり

源更衣逝去ノ時ハなほあことつあ
らも木も侍りたるトアリ
モヤギナレハこの友に侍り
ありてトアリ

御書始

西宮宮白太子着座 總前 王卿着座
皆持書卷副笏 侍臣西三出候博士
尚復着座學士殿上成業六位 皆展
書尚復唱文長博士讀御註孝經
五字 尚復云此許 詞云已未狀尚復
五讀字如先博士等立王卿立入御
着饗食祿給祿大樹大臣加御衣

博士樹尚復赤被皆拜
七歳例村上 兼平二一條院 寛和二
二六二
親王入學 講堂 西南一向東西而着
寛平八十六三 存世親王入學當皇朝
召文章博士紀長谷雄御自持親書
賜之長谷雄拜舞親王泰堂皇孫座着
進士下諸生上也

世のうけひくまよ 河守引 兼引

あやうく木御 家 世百ありなり

まをたすはなりぬたを 世のしり

まをいどいぶよりこうあう 安堵アリタレ也

おとめ女御も 弘徽殿

のむ 源祖母

木御 黄泉也

まをい 源祖母

まをい 源祖母

まをい 源祖母

兄むつひなり 源重

夜木木御 祖母ノ幸去ラカシキコトナク

まをい 源重

まをい 源重

まをい 源重

まをい 源重

まをい 源重

まをい 源重

まをい 源重

まをい 源重

江次第云豫定其書并博士尚復
近代難可御讀七徑只以紀傳道儒
博學被聽昇殿之車夕鳥侍讀
之人

御書 御註孝經

旧事本紀曰天物部等廿五部人同帶
兵仗天降供奉

物部氏遠祖天津麻良神代はを要
天孫天降降時西を記をうけぬり
の子孫諸物部を領して武勇の力を
掌そ及勇者をものゆもむるハ

山 女みこ道二所 朱雀内一服

山 高宮 女二宮 弘徽殿殿

山 女二宮 市他殿

山 赤舂院 弘キ女服

山 といふえー

山 琴 笛

あつていつけハー
あまのあつていつけハマコト

うす人のねんをいひてとふ也
右大臣源光諸道兼備之例也

山 宇多御門御誠
寛平遺誠外蕃之人必可覓

者在幕中見之不可直對耳
李環朕已失之慎之

鴻臚館いつけハヤリ

去蕃寮也七条朱雀也四境云
所ノ邊也 延曆遷都始(東西ノ大宮ニ
置之弘仁中為東寺西寺ニ
去之遠也蕃ハ藩也遠藩ノ客ノ
来朝ニ極スル所也
職員令ニ去蕃ヲ法伴テラフ人ト
訓ス去ハ僧蕃ハ客也昔僧尼百
濟國ヨリ来朝セル也

弘徽殿をどもしりしをふ法也よん

やそみものうらやしめまつりきふ

いさぶともぬあさきまなりとも

いそむらゑるぬづよさののむら

えうしそちちあひだ女法あつらふ

所け法そそ子 ねそ こそどなすひ

あぶきふぞちのりきも法うごもる

あぶぐいまり ちさめううもづ

げよれをすれづいとわうううらとけぬ

あまびらさまきりめおひよめたり

わごの法うめんハまるもよん

いとゆえらひも雲わをひり

あぶきいひつげバとくもうそ

ななりあぶよひとの法あなりきも

りのころ こまうどのまいまるがな

うこたさう さんありるをきい

めしそ宮乃うちめさむしは

うぶのみど乃法いあめあきん

いそう志のびてこの見こそ鴻臚

館まつりたりはうけみそ

御寮

物部

武士

仇

款

弘徽殿

源ノ客旅女法子タナニカル也

推換

山 赤舂ノ女宮達又自餘女由更衣子

山 敵媚 伊勢一又生

山 此版弘キ女方ナラ云 此兄才中

山 學問の道也

山 草子也

山 源

山 高藤人

山 御客也蕃客也

山 相人

山 源

山 館

國はわやと云うて
義源ノ具生し有可登天位相若
如此者可傑具舟船時ハ人臣ニテテ
國家扶佐ト可也古歌相之云臣下
ニテ成遊ニキト也

緒説見事ナリ

神樂ノ才男濁し由
ナリ才也 何一決ニテ

清濁兩説濁方ハ枕載チ山下水

博士

天乎二年始學父章博士

漢書曰明於古今温古知新謂之

博士

はうまつる、右大瓶の子乃やうり
れももてぬ侍でさくまつる、相人れどり
さうてあささび首ヲ傾テうぶあやし
らよのちやとなりて、帝王乃見えよ
ろのぬよのりどさおれし、主人の
そちささくたれどしうまるとも
けむ、れ回やけのうまとなりて、天下城
そするらうまるとし、おれささく
そふ瓶もしとぎぬうし、こさえ、うせ
うし、いひらうら、こももなんいしとらう

けりもる、詩賦あえなむつらりうりせ相人

あは帰うり去き糸なんともるふ、うく、けり源ノ賞

うぶよんよたいめんし、きるよろこび

うりてちのけしうぶさ、ころろを城

れりうらうらうらうらに、見こも、いしとら

なるうけつらりぬ、うを相人かぎりうめ感日本記

きそまつらて、みどき城うらものどもを家

きぐそまつる、れ回やけもれ回被物ナト也

きめいす、城のづつ、こむ弘らうて、き

きゆるらうら、朱雀院春宮の、外稜父大臣れ回ぢ物と

城より物

世高藤人ノ進物梅枝巻ニ誤

アリ

東宮はれ回ぢ物と

二條太政大臣也、于時右大臣

いなることと相...
和國相人

朱雀院外戚右大臣ナト春宮ヲ
タチカハレニヤトウタカハルニ

和國相人
追可動

諸抄仲直藤原...
トモ和國ノ相傳未欽唐土ノ相

傳未欽不審
對高廉人相シテ和國ノ相ト
云伐欽

なむいふなることと相...
和國相人モカヤウ申也

和國相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

いふ道...
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

和國ノ相人モカヤウ申也
和國ノ相人モカヤウ申也

四宮

先帝

式部卿 始兵部卿也

藤土壺

源氏宮女三宮の母

三代の...
三代奉也

春宮の女御 朱雀母

春宮の母の女御トイフヤソシテ
春宮の女御ト云
伊物ニモ二條后ヲ春宮女御トイリ

春宮の女御ト云
伊物ニモ二條后ヲ春宮女御トイリ

春宮の女御ト云
伊物ニモ二條后ヲ春宮女御トイリ

准據
たづねひもれは...
先帝の口乃宮流...
乃人...
時より...
思ふて...

春宮の女御ト云
伊物ニモ二條后ヲ春宮女御トイリ
春宮の女御ト云
伊物ニモ二條后ヲ春宮女御トイリ
春宮の女御ト云
伊物ニモ二條后ヲ春宮女御トイリ

御せうとの共そのけ
山 兄ヲモセウトイニ好ヲモイモウト
云定ル也

藤壺 飛香舎 藤壺殿未但上右
非州未筑建曆日記

源氏のあさひまうりて
桐更衣大納言女藤女御光帝皇
ナレハ際ニサリテ也

めくく 深秘院也
源タキ也

あまのけつさなりり
かく書とあるに餘情あり

源氏の君
コニテハメラ源氏の君トアリコノ
已前湯姓トニエタリ已下此中
有数多
或抄高明帝より七末の時源の君を
あまのけつさ源氏君とす其例
なり
あけく
帝ノ藤壺ハ母ノ出御ナレハ後

藤壺 藤壺の君は
いふにむかひに
むすふ

初定 藤壺
再初定トハ
日列
たれどつらむに
むすふ

宮ニ程候人
御後見達
藤壺
むすふ

紫上文
藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

藤壺
むすふ

壺ノ源ヲ船ヲタテハ公也
世トモハニ弘微殿ノ御也
上ノ御書タルモノ歟

ナリトシテハひそひそ
余の女御達ハ年ノまじりゆき
ありまそふら

若壺ヲ源ノミタラセツル也
もやトアルハハレナトヒトニ

木ノひざら
思共也 野万葉

あつとみゆそ
山記 歌外人 白文

あつとみゆそらうな
藤壺ノ源をひたし
なつとみゆそらうな

河
側ノ教ニサテニハカ父心也

木ノひざらわいあふやうぐもつとらう

きしどらわわらびらうらうらう

らうらうらうらうらうらう

取のづつらうらうらうらうらう

はうづつらうらうらうらう

似
らうらうらうらうらう

若
らうらうらうらうらう

きこめめつらうらうらう

さひらららららららららら

らうらうらうらうらうらう

きこめめつらうらうらう

こらななんもらわめらわ

らうらうらうらうらうらう

いしらうらうらうらう

あつとみゆそらうらうらう

らうらうらうらうらうらう

紅葉まつらうらうらう

こらななんもらわめらわ

の女御もこのうらうらう

ゆらうらうらうらうらう

若壺

桐更衣

孫壺

源藤

輕
日記 無禮 新撰万葉

奥入
愛増 延喜式 卷之四

若壺

若ノ如クニテ元來桐更衣ヲウラケ格ニ名残ニ源ヲモクニウケ格也

世にたひひたりとてふてふつり
さしひ名さうたをさるるのぬ
かたも

諸抄弘徽殿版の宮達の本とて

愚業は版、ゆ、不富、う、

後壺のちより

源のちよりさうらるる意をそ又併

紫のちより

世人ひらるる君とさるる

敦慶親王 宇多太子 号玉光宮

好色無双之美人也 延喜八載

是志親王 仁和後始賜姓号光源内宮

西三條右大臣源光 仁和后子

光少将

かやく

上東門院 一孝院 中内之時号耀藤室

十二元服

礼記曰天子之十二而冠

九傳曰歲星十二歳一周天道大倫故自夏殷至皆

一條院 寛弘七十七 元服十二

町くの郷食

小山抄五所と郷食膳事

王卿廳女房別納殿上人藏人所内亮

諸大夫 二百膳 穀倉院屯食 十五具 蔵

大夫 貞 廳別納 各十五具

以上應和制

内藏寮 一町

近衛南堀川西

九明天皇和銅元七月丁酉内藏寮

始置史生買

仁明天皇長十年八月丙戌初穀倉院

穀倉院 西南南地東西各元大南北

二条南朱雀西

納幾内諸國銅錢無主位職田及

没官田太 稻米諸庄物

勤年中饗有給及四位五位別當

預藏人等

木田やけとよ

木田やけ八半のり

物しや木田やけきり、世にきぶひしとて

まうりききひ、君たうり木田やけの法

まじお城のやけはきとてんてきう

うきあひる世の人ひるる君ときあ

あつたなびきて法木田やけとて

なればかやくひの宮ときあ、こねま

の法はハ法ういといまうく木田や

十二元服法元服しききふおら木田

となんて、のぶうりりるとふことと

きやうたなびとてごうき院なる

木田やけとよふつとまの法

なるといぞやどりの木田やけとあ

あしとてつくしと法うまうりた

まの法のひんがしをきしひ

むきとてりたて、とてんさる法

ひきひれ乃木とての法

うるの法を源氏まうりあみ

弘及宮達

源

中

后起

朱雀

新日本記

木田やけ

内藏寮

穀倉院

東庇

東向

椅子

加冠ヲ引入上云

河

髪掛

懸

木がまの殿

清涼殿元服親王一世源氏也
但延喜御太子之暗寛平九七三
於清涼殿簾前加元服大夫時平
權大夫菅加冠左中將定國理髮
昂日受禪

東向

母屋御簾中撤書御座鋪毯
代親座東向南向敷前錦蓋被
西面
元服之時東面

引入座孫庇

理髮座 親王座東 菅圍座

申時

成明親王 天慶三十甲申討

於後行殿東廂陪御前加元服

附射のまま先例如くハ
の如うトアリ可付眼

大藏の蔵人つふまつる

理髮之人蔵頭大藏卿ハ

元服之時後宮候前殿例

延曆七甲子皇后御前殿

延喜御記曰永和五年日記云女御

尚侍料障子二脚又屏風施其後

御休下

西宮云親王下侍政衣 黄衣也

冠者休下也康保六御記云下侍

第一間施立簾風具申敷土鋪二枚

茵一枚為親王換衣下云一世源氏

元服以下侍為休下見西宮云

源氏云まつり

世衣束衣童服之時赤色綸服

袍也殿上重モ赤色

元服後源氏無位一人也衣服令云

無位黄袍也西宮同之元服以後ハ

縫服黄袍也淺黄ト云流アリ不
用之由也

木として拜し

親王自仙華門於東庭拜舞

太子賜笏御衣於堂上拜舞

ゆひまゝつゝおきりこのまわひさ

くみえんこむらげなり大蔵は蔵人

つゝつゝつゝとよらなる法を

そむかむらげをを御門 相衣

みまゝはとむらげ地

むづもく秘んどふ冠儀

法休下也言所下殿子拜舞

まるまゝてむらげ衣

見なる人なるむらげ將

まゝて元志のびり相衣

まゝでむらげもゆり相衣

とりへ日本記

むらげ元服アリテ容服アシケルハキヤ也

むらげ受常 万葉

むらげ葵上

ゆりも法り源

ゆりも法り御門

ゆりも法り源

ゆりも法り御門

ゆりも法り源

源氏

諸抄有説、

み二版

葵上又方大臣尚御門御妹三宮其御

元服當夜嫁要列

村上高皇子高親王御親是仍高羽

侍

殿上人御侍上御侍臣是之九源氏

元服時主侍下御侍子ニ着給テ

御遊盃酌アリ見西宮

内侍宣言うけさうりて

西宮云如智内侍於妻下下又

引入女藏人給祿下長橋奉着當於

庭前拜舞

御盃の

西宮云御候御前孫廂賜酒者

有舞樂御遊

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

李朝主記

なつりるをさひびづまもとわんをさるば

たれけきまう、はかひひまふてきて

んこれ同名おなままうらわぶみさうら乃

吉原のもゑお源氏つよさうらたれ

けしおまふみきこめおこと源氏お

つよさうらおまふてさうらもあふ

きこめおまふたれさうら田侍道うけあり

つよさうらたれまうらおまふら

まうらおまふらくのおれさうらの余ゆり

てきさうらおまふらおまふら

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

いよよわい

副卧

催

殿上

親王

著

源

常侍金幣

白大褂

緑物

御前

御階下

上達部列

左馬寮

長橋

下

舞踏

藏命

鷹

親王達

差

お

お

お

お

お

お

お

山

男女元格イウモホ也

御階下

親王達

差

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

お

藏人町の唐

御鷹飼御隨身八藏人町ノ被官也
常代ハ親王元服ハ馬と引ひハ
遊宴ノ與あハ引ひハ
新儀式あハ引ひハ
卷あハ

引入大臣の祿ハ馬唐あハ
限あハ

みあハ
東宮御元服時ノ御あハ

引入大臣徳頭あハ
兼平四十二七克明あハ

親王家加冠あハ
曰七奉行明親王元服あハ

天慶五盛明親王元服實賴あハ
右助例皆私家あハ

禁中あハ
右あハ

元服ノ人ノ本家ノ儲也

王御已下取之列庭中 有作法

一世源氏ハ献物無之此物諸あハ
加あハ

秀載于岷江
他食 本家ヨリ 諸陣ノ役ニ分テ
給物也見西宮 訓ツミイヒ

親王元服之時ハ諸官之長大臣タル人
下知メ令個之源氏ノ元服カあハ

禄幸檀
東宮御元服斗あハ

立之

東宮親王三世源氏あハ

中あハ

元服當夜嫁娶例

延喜十三年保明親王元服夜嫁娶あハ

寛和十三年三條院于時親王御元服同日

うむりききふそ日あハ

献物あハ

てつあハ

幸檀あハ

御元服のあハ

つぎあハ

右大臣あハ

執あハ

もくあハ

くあハ

女あハ

源あハ

三宮あハ

法門あハ

内あハ

源あハ

朱あハ

外あハ

世中あハ

左あハ

三あハ

白孝エラ法興院大相国女尚侍侍子
為副卧大鏡

蔵人サ将

河 執政息補蔵人サ将例

清慎公 實賴 貞信益男母宇多院白孝

源順子延喜十九年二月廿六分任左近衛

權将延長四年二月廿五日神蔵人

謙徳公 伊予 右大臣師神男 天曆二年正月

廿日任左近将 去七百餘位 二月廿日神蔵

とくふまて及中將

くく人のサ将まつくいとさくく 木うき紙

左大臣ト右大臣法中不快也

右木木との法中あいとさくくねどえん

くくまづさくくづまふまの君あを

まう木とさくくさくくづまふハ何海

かまふ源河さくくまふなん源氏の君を

くくの子あめさくくまふまぶさくく

ゆとまみもえさくくまふのつらまは

あらつがのあつりさめをたさひゆくと

木ひささくくまふさくくゆん人をさくく

まふまふさくく木さくくさくく木はさくく

君いさ木うげまづさくくさくく

えめれまさくくさくくつづま木はさくく

ゆき木さくくまふの法いとさくく

うさくくさくくさくくまふまふさくく

さくくさくくさくくまふさくくさくく

何さくくさくくまふのさくくまふさくく

法河さくくまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

さくくまふまふのさくくまふのさくく

木回いどのふ二三日なぞきめくしよまきぞ

うめどきとよ木うまきほほとみつみねく罪ナク

木回てつとなみうづまきつめ

うら流ういどのんぐ世中にをるへ源葵ノ名仕女扇

うめをえりとのへまきしてまきつて

あふ流むつうぬき流ゆをびを源心入庵也

木回かく木回いづづ内ふたりの子シゴト

まけいづを流ぞうしよまきほあす所淑景舎 相違也 曹子

の沛ういづのんぐまきぞちりげ里殿 二条院也 修理職

うめいそまふさむの敷いまるしよ

きくみづつうまき宣旨らづりて無二 改

ためつうまきむもの木立山のたずま

ひたりうきむころなるを流のころ

ひろくしちりてめぞういころの

しるしうまきころまきふやうねお

人をすてまむむわとのみななりけ

木回しるむひろくまきみとふ名光君 高麗人

どのめであてまきつづをまきり

まきぞういひつてふとなん

内ふたりのあけつて
母更衣ノ住タニ淑景舎ヲスガニ
源ノ直廬ニ給ニモヤモチノ更衣
ノ方ノ人ノ不退此舎ニサナラレ
ナリ

ほとのぬ
盛明親王
十五宮のすゆまの二條院とい
流くまき 栄花物語

いけのころ 池底也
梅嶺題鶴池心浴鳳凰

うめあまきふりしんをまき
下ニ後主ノ心アル

ひる君とあるハ
いませノ人光まきとまきトアリ
コニ高麗人ノツケタテニワルト
アリ 作物語カオホメカレシツサト
あ祝ヲマケタリ
いひつてふとなん
式部ノ書くるしとれノ高麗
人のよのやうに三書あかきなる
高麗人のつげそふりつるうと
人のいひつてふとなん

せつとと兄及びひーやう
に書きたるいつれは時とふ
初なる此の巻を
この世にありをさう
巻く書は、り致す
庵うはよる味

明和三四八林所寄可引終之音博陸台命也 依漢言也 同十九執業先注序
世卷二十九日遂



